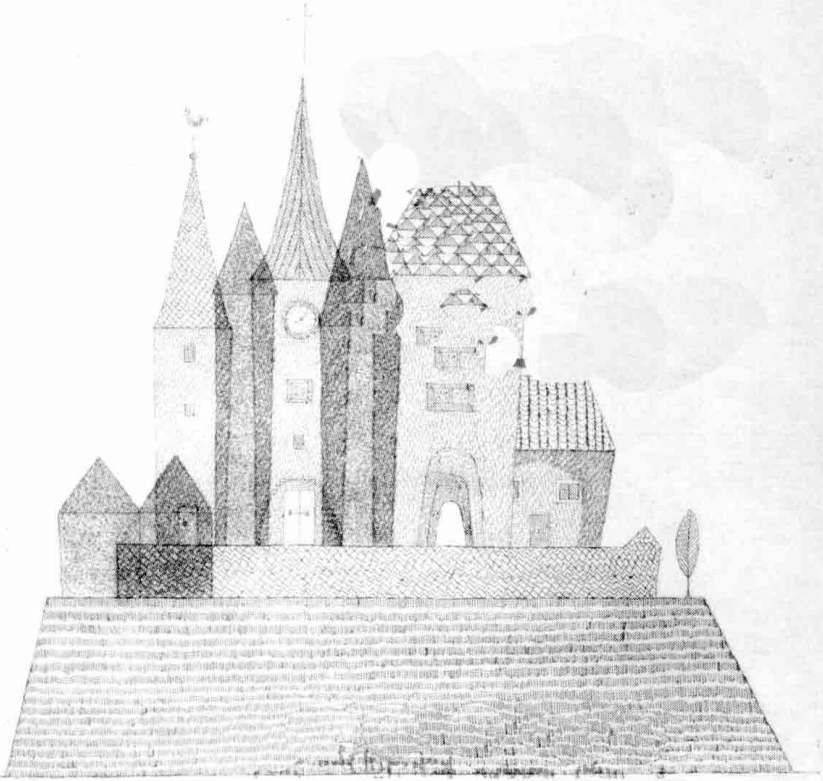
ヴィレッジに雨

山本道子

新潮社

ヴィレッジに雨

山本道子



ヴィレッジに雨（あめ）

著者　山本道子（やまもとみちこ）

昭和五十八年二月十日印刷
昭和五十八年二月十五日発行

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定価　一一〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・株式会社光邦　製本所・大口製本株式会社

© Michiko Yamamoto Printed in Japan 1983

ISBN4-10-323404-0　C0093

目次

ヴィレッジに雨　5
魔女の樹　137
お呪(まじな)い　155
公園幻想　173
風のない夜　219
あとがき　245

装画　南桂子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヴィレッジに雨

ヴィレッジに雨

1

望遠鏡を手にしたジュディの父親が、裏ドアから姿を見せて、空に顔をむけた。彼の見上げている空の辺りになにがあるのか、鳥の群でも見えるのだろうか。美沙子は、テラスへ出て、川むこうの雑木林に立っている彼の視線をたどってみた。

空にはなにもなかった。

望遠鏡のレンズに吸いこまれているはずのその辺りには、流れている雲のひと筋さえも見られなかった。肉眼では見とどけることのできないものでも浮かんでいるのだろうか。

美沙子はユリエを呼んで、望遠鏡を持って来させた。なにが見えるの、とユリエが訊いた。

「空よ」

美沙子は、ユリエの手から望遠鏡を取って、革ケースを外した。

空には、やはりなにもなかった。

「いつかの鶴、また来るかしら」

ユリエは、背のびをして雑木林のむこうの空を見やった。

「もうそろそろ来る頃ね」

彼女が気にかけているのは、サンドヒルクレーンという種類の鶴のことで、昨年の秋、この二

階のテラスに舞い降りて、羽根を憩めているのを、偶然母娘で目撃したのであった。そのときの驚きと、すぐには醒めなかった興奮が、空を見あげていると、いつまでもその辺りの空間に漂っているような気がするのはたしかだった。

その鶴は、全身が湿った砂色をしており、頭部の頂きが、くっきりした紅色だった。テラスの手摺りにとまって、長い頸をくねらせるようにして周囲を見まわしているその異様なものに気づいたとき、美沙子は、息を呑んで立竦んだ。「クレーンだ」、とユリエが小声でいった。すぐ眼の前に出現したその羽毛の固まりと長い頸は、まぎれもなく鶴の姿をしていたのだった。

しかし美沙子が、鶴だ、とはっきり思ったのは、それが巨きな影のように翼を拡げて、風のように翔び立った瞬間であった。

この辺りの空は、渡り鳥の道になっているのかもしれなかった。鳥の一群が、喧しく騒ぎながら、夏の終りから秋にかけて、南へ翔び去って行くのがよく見られた。

ユリエは鶴の姿をよく記憶していて、北アメリカ地方の鳥類図鑑に、サンドヒルクレーンという種類を見つけだした。砂丘のようになだらかな鶴の背のかたちが、この名称からさらに印象深くなった。

はじめて鶴がやって来たその日から数日ほど経った夕刻、美沙子は再びテラスの手摺りの同じ場所にそれを見た。

曇天の夕暮、薄墨色に見える鶴の姿は、すでに異様なものというよりも、どこか神秘なものに見えたのだった。もっとも見ている眼の前で、空の彼方から翔んで来てふわりと舞い降りたというのであれば、これほどの戸惑いも感じなかったであろう。しかしはじめて眼にしたときも、そして二度目も鶴は、振りむくとそこにいたのである。

忽然と姿を見せた灰色の生きものが暮色の濃い空と、黒く重なった雑木を背景にしていては、

何度それと対面しても驚かされずにすむということはないであろう。
そのときの美沙子は、家のなかに独りきりだった。カズオもユリエも不在だった。
鶴だわ、また来たわ、美沙子は声に出してそういってから、不意に恐怖を覚えた。ガラス戸越しではあったが、鶴の長い頸は、家のなかを窺っているようにくねくねと動いていた。そして、ほんの二、三秒のうちに、いやに長く見える翼をおもむろに拡げると、ふわっと宙に浮いた。
そしてまず視界から消えたのは、黒い筋になってぶらさがっていた二本の脚であった。
「なにもいないわ」
ユリエにそういってから、美沙子は望遠鏡の視点をずらせた。川むこうの木柵の奥に、おとこのジーンズが見えた。彼の下半身が視界を塞ぎ、ついで白いシャツの胸にぶつかり、彼の顔が見えた。
おとこは望遠鏡のレンズを正面にむけていた。つまり美沙子のレンズを彼もまともに捉えているというわけだった。声を呑む思いで、美沙子は望遠鏡をユリエの手にわたした。
ジュディの父親は、美沙子の遠い視線におさえこまれでもしたように、黒っぽい立像になって、ブッシュに埋もれたままじっとしていた。
川むこうの家について、美沙子が知っているのはほんのわずかだった。ジュニア・ハイスクール八年生のユリエは、人づきあいのあまり上手くない母親より、この辺のことにずっと通じていた。
市街に近い日系人が多く住みついている地区からこの郊外に移ってまだ二年にならない。美沙子は、ユリエから聞かされる情報以外は、隣近所の噂話などとも、ほとんど無縁といってよかった。
川むこうの雑木林のなかのその家が、ジュディの家であることもユリエから教えられたのだっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。シニア・ハイスクール十年生のジュディは、この近辺でもっとも目立つ存在だった。いつも電動式の車椅子で出歩いている。

両足のかわりに、実体のないジーンズの脚がたらりと椅子に掛かっている。それに、腕も長い方が肘のあたりまでで、片方は肩の下あたりで切断されている。両腕とも、ときには切断のあとがはっきり衣服から露出していることがある。

彼女は、素直な蜂蜜色の髪をなびかせながら、道路端をすいすい通りかかる。たいていの場合、彼女の悧口なシェパードが従っている。

そうだったのか、あれがあの少女の家だったのか。美沙子はユリエにそのことを教えられたとき、どこか定かではない一点を凝視するような思いで、川むこうを眺めた。

ジュディの父親とも面識はない。望遠鏡を手にして、空の一角を振り仰いでいたひとが実際にジュディの父親であったかどうか、そこのところもはっきりしない。しかし美沙子は、あのひとはジュディの父親にちがいないと思った。彼も秋口になると、空が気がかりになるのだろう。

鳥の群がさまざまに啼きたてながら、空高く頭上を横切るのを、どこまでも見送りたいという思いがある。もしかしたらあのひとも、鶴の飛来を心待ちにしているのかもしれない。

ジュディの母親は、半白の髪を結いあげた美しい中年婦人で、通りで行きあうと、かならず微笑をかわす顔見知りだった。彼女は、車椅子のジュディが、かなりのスピードで先へ行ってしまうあとから、いつも悠然と歩いて行く。ジュディと犬の足にはとてもかなわない、というようにゆっくりついて行く。

その落着きはらった歩調には、つい振り返って見送りたくなるような、優美な雰囲気がある。娘の車椅子に従うその歩調が、あのようにすっかり安定したものになるのに、どれだけの重い時間を費したか。

病巣を着実に切断しながら生きつづけているジュディは、母親のゆったりとした歩調をあとに、これ見よがしにすいすいと走って行く。
あるとき、美沙子はデパートの勘定台の行列にジュディを見かけた。彼女は、自分の番になると、カウンターの上にTシャツを置いた。店員は彼女の口許からそれを受け取って、笑顔でなにか話しかけた。ジュディの笑い声が聞こえた。美沙子は、その少女の笑い声を聞くのははじめてだった。そして明るいその声に鳩の啼く声を連想した。
カウンターを離れて、くるりと顔をむけたとき、ジュディの頬にただよっていた微笑は、彼女の母親がいつも見せている、ひっそりとした微笑みにそっくりだった。
ジュディのことが、母と娘のあいだでしばしば話題になった。きれいなひとね、と口にするたびに、美沙子はいつもジュディの緑色の瞳を連想した。
「どんな子、面白い子」
美沙子の問いにユリエは首を傾げた。
「そうね、なんともいえない、とくにどうということはないわ」
それから遠くを見るような眼差しになって、歩きたいだろうな、スニーカーで、と呟いた。

望遠鏡で、美沙子はその裏庭を眺めた。
薄黄色のアザレアが咲いている。肉眼では見えなかった花だ。
雑木の群生が建物まで迫っていて、いつかジュディの父親が出て来た裏ドアは、生い繁った枝葉に半分以上隠されている。
彼がレンズ越しにわたしを見たとしたら、このテラスはどのように映っただろう。美沙子はい

つまでもそのことに拘泥(こだわ)っていた。そのように見ていると、彼が再度、ドアの周囲の枝葉をざわめかせて姿を見せるような気配を感じたりする。

日曜日の夕刻はどこからともなく、肉の焼けるにおいが流れて来る。気候のよい季節には、庭やテラスで直火焼きの肉を好んで食べる。

カズオはまだ釣から帰って来ない。週末には海釣りに出かけるのが、彼の近年の習慣になっている。美沙子自身、雨期ともいえる寒い季節が過ぎると、カズオの野外への関心が強くなることを、内心期待するようになって、もう何年ぐらいになるだろうかと思う。

日系アメリカ人二世であるドクター・カトーと結婚したのは、ハワイ大学の留学生だったときで、ひと廻りも齢のはなれた彼との生活に、もしユリエがいなければ、今日まで無事に過せたかどうか自信がない。

父親のたどたどしい日本語と、母親の決して達者とはいえない英語のなかで育ったということは、おのずと父親とは英語で、母親とは日本語でという複雑な家庭内の環境に、ユリエはすっかり馴らされていて、一応は流暢といえないまでも日本語を話すこともできる。母親が日本人ということで、完全な日系三世とはいえないが、この世代には珍らしい日米語のつかい分けができる。

ハワイの大学に留学して、専攻していた比較文学を中途半端に放り出して、カズオと結婚した頃、美沙子は、日本人でありながら、日本語をまったく解さない多くの友だちを持っていた。彼らへの好奇心とは、いったいなんであったのか、近頃になって、美沙子はそれが自身の根強い民族意識の裏返しではなかったかと考えるようになっていた。

それは、十四歳になったユリエを、毎日相手にしながら、つくづく考えることである。ユリエがもし日本語をまったく理解しようとしないこどもだとしたら、どんなにか怖ろしいだろうと思う。彼女の思考言語が、どうやら英語だけらしいというのは、最近になってはっきりしたことで

はあるが、それすら美沙子は明朗に受けとめる気分になれない。
日本語の読み書きから遠去かってしまったユリエに、母親としては、ただ手をつかねて見過すしかなかった年月を、美沙子はすでに取り返しのつかない時の流れとして、ひとり思いかえすのである。
アメリカ人でもあり日本人でもあるユリエの将来の問題など、夫婦で一度も話しあったことはなかった。たとえ美沙子のほうから彼に提出する話題であっても、どうしてもそこまで話しあう気になれない。
日本人同志の夫婦であれば、このような奇妙な複雑さとは無縁でいられるのだろうと、美沙子はたえず心細い気がする。

父と娘はファミリーセンターのテニスクラブに加入している。やみつきになりはじめた頃、ゴム紐つきのトレーニング用のボールが、電線に引っかかったことがあった。ガレージ前のコンクリートで、ラケットを振りまわして練習するのが、その頃のユリエの日課であった。
黄色いボールは、電線にゴム紐を何重にも絡ませてぶら下っている。下から引っ張ってみてもゴムが伸びるばかりで落ちて来ない。
はやくボールをなんとかしないと、通りがかりのひとにでも見つかったら叱られそうだ。美沙子は、まだ隣近所に馴染のない入居したての家だけに、そんなことでも心細い思いになった。大丈夫、とユリエは気楽な顔をして、父親の帰りを待つ気でいる。しかしその前に誰かの通報でリフトつきの、スペシャル・カーが来たら大事(おおごと)ではないか。人だかりがして大騒ぎになる。そんなに心配ならポリスを呼んだほうが早い、とユリエはいう。

スペシャル・カーなどと母と娘で勝手に称んでいる作業用のトラックが、この辺りの電柱に絡みついて繁茂している蔦を刈り取る作業に従事しているところを、美沙子は時どき見かけることがあった。

電柱を手がかりに育ち放題の蔦の凄さは、感嘆するほどで、放っておけば電柱の天辺までもすっぽり覆われてしまって、上の方がふくらんだかたちの奇妙な蔦の樹になってしまう。そうなるまでに刈りとらないと、電柱も電線も蔦の食いものにされてしまう。

従業員が、高だかと伸びあがった機械の上で、刃物を使って蔦を剝ぎ取っているのを、美沙子は飽きることなく見物したこともあった。そして、蔦の葉をごっそり除いたあとの、いかにも強靱そうな枝には驚かされた。細い網の目のように入り組んだそれが、電柱を締めあげるかたちで纏いついている。その枝幹を引き剝すのはひと仕事といったようすで、それらの電柱には、網目だけがそのままにされている場合が多い。

通りかかる自動車も、空にかかっているボールのことなど気づかずに行ってしまう。新聞配達の少年も、日暮れて先を急ぐばかりで誰ひとりとして宙ぶらりんの黄色いボールに眼もくれない。

帰宅したカズオは、ふたりの見ている前で、実に造作なくボールを落した。垂れ下がっていたゴム紐を引っ張っただけのことだった。ユリエはそんなことにも父親への信頼を一層かためるようであった。ボールが落ちたのも、何度もゴム紐を引っ張っているうちに、電線に密着していた箇所が擦り切れただけのことで、とくに彼の手腕ということではない。しかし、日頃からユリエと一緒になって何事にもおろおろしてしまう母親を見ているというだけで、接触のすくない父親の株が上がるのは道理かもしれないのだった。

溺愛していた飼い猫が、家の前の路上で暴走車に轢き逃げされたときも、ユリエはすぐにオフィスの父親に電話で救けをもとめた。猫はすでに血を流して死んでおり、いくら頼りがいのある

父親が駆け戻ったにしても、どうすることもできないのはわかりきったことであった。しかしうろたえたユリエには、咄嗟の場合、父親に縋ることしか頭にないのだった。

轢き逃げを目撃したのは、隣家の大学生であるブライアンであった。冬の夕刻のことで、すでに夜とかわらない闇がひろがっていた。ブライアンが帰宅したとき、彼の自動車のライトのなかで、前を走っていた自動車にはねられた猫が、はっきり浮きあがったというのだった。一部始終をようやく理解して泣き声を発したユリエに、轢いたのは自分ではないと、ブライアンは必死の様相で繰り返した。美沙子はこの隣家の大学生に、ユリエに代って礼をのべてから、バスタオルで猫の屍骸を包みこんで、ダンボールの箱に移した。

ユリエの狂乱じみた驚きと嘆きは、手のつけようがなく、父親が帰宅するまでの一時間余りのあいだ、ドアの裏側にしがみついて泣きつづけた。そして父親の自動車がガレージに入る音を聴きつけると、裸足のまま走り出て、その胸にとびこんで、一層泣きわめいたのであった。

ドアの裏側にしがみつくぐらいなら、どうしてわたしの胸に来ないのかしら。美沙子は後になってカズオに笑いながらそういった。母親は頼りにならないということを立証されたようなもので、笑いながらも、美沙子はどこか腑に落ちないのであった。

ユリエが、泣いて騒ぎたてているあいだに、実際に猫の屍骸をバスタオルで包んで抱きとったのはわたしなのだ、ということを夫と娘に何度か強調しながらも、美沙子は、父と娘の関係をのびやかな気分で眺められない自身に、内心惘(あき)れてはいたのである。

父と娘は、翌朝、申しあわせたように早起きして、裏庭に猫の墓を造った。川の流れが、まるで地底から聴こえるような、静まりかえった朝、落葉を鳴らして、ふたりは木立ちのなかに穴を掘った。

美沙子は、寝室の窓から、彼らの共同作業を見守った。上背のあるカズオの、幅のある逞しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com